

日本語教室の現場から



学習者が多様化する中、日本語教育の現場では、生活に根ざした活動や、働くための日本語に特化したカリキュラムなど、いろいろな取り組みが行われています。多様な学びの場とそれを担う人たち、そして学ぶ人たちを紹介します。

生活ですぐに使える日本語を シェイクハンズ

特定非営利活動法人シェイクハンズは2005年に犬山市を中心に、子どもたちの生活、特に学校の授業のための日本語支援を中心に活動を開始しました。そして、リーマンショック後は日本語ができないと職を追われるという危機感を持った子どもの親から日本語を教えて欲しいという要望を受けて、大人向けの日本語教室も開始しました。日本語の初歩から始める教室でしたが、「文法の積み上げではなく、実用的な日本語を身に付けたい」というニーズに応えるよう、食品のアレルギー、カロリー表示の見方、119番通報のかけ方など、生活に密着した言葉を蓄積させていくように



▲イベントで母国料理を紹介

教えています。

「避難する」という字の読み方や意味だけでなく、この文字を見たら「今いるところから離れる」という行動をすることも伝えます。

また、母国の料理を作って地域のイベントに参加したり、地元の警察や消防署による防災講座やAED講習を実施したりしています。

このように、外国人のライフステージに合わせた日本語を、日本人と触れ合いながら学べるように意識しています。



▲警察による防災講座

Web <http://shake-hands.jp/>

はたらくための日本語 一般財団法人 日本国際協力センター(JICE)



▲面接の練習風景

JICE中部支所(名古屋市中区)は厚生労働省委託事業「外国人就労定着支援研修」を実施しています。この研修は、就労に制限のない在留資格を持ち、安定雇用を目指す外国人を対象にし、就労に必要な日本語や知識・スキルなどを学ぶものです。

受講するには、ハローワークを通して申し込む必要があり、初級者対象のレベル1から、日本語能力試験* N2合格程度の日本語力の習得を目指すレベル5まで、5段階のコースにわけられています。日本語の勉強だけでなく、求人票の読み方、面接での答え方、履歴書の書き方などを、学習者の理解度を見ながら課題や目標が達成できるように指導しています。例えば、面接の授業では資格の有無に対する質問に、「全然ないです」と答えた受講者には、「今、日本語能力試験のN3に備えて勉強中です」と答えると面接官にアピールできると、実践に役立つポイントをアドバイスします。受講者のこれまでの経験から自分の好きなことや得意なことを分析して、それを活かせるような仕事を考える、キャリアプランニングの手助けなど、さまざまなサポートも授業の中で行っていきます。また、仕事への興味や視野を広げると共に、職場でのマナーやスキルを学ぶために、外国人の雇用を考えている企業への職場見学も実施しています。

職場見学がきっかけとなり、今まで興味のなかった分野

への就職が決まった受講者もおり、安定雇用に向けた良い機会にもなっています。

*日本語能力試験:日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し認定する試験として、1984年に、国際交流基金と日本国際教育支援協会(当時:日本国際教育協会)の2団体が共催で実施している。N1(1級 最も高度)~N5(5級)までの5段階レベル。

日本語の勉強、頑張っています!

コルケ ロドリゴさん(ペルー出身)

私はペルーで日系の企業に勤めていましたが、ペルーでの生活は大変なので、日本語を勉強して日本語能力試験を受け、いい仕事につきたいと考えて努力しています。家でも毎日1時間は日本語の勉強をしています。でも漢字が難しいので苦労しています。日本語能力試験の3級(N3)に備えて勉強中です。この研修を終えたら、仕事さがしを始めます。

マツカワ アナリンさん(フィリピン出身)

日本に来た当初は全く日本語ができず、自習とテレビや友達との会話で勉強しました。小学校で英語を教える資格を取って、現在ボランティアで英語のアシスタントをしています。子どもが大好きなので、好かれる先生になって子どもたちに英語を教えるのが夢です。JICEでは先生がわかりやすく教えてくれるので感謝しています。今は毎日2時間、家で日本語の勉強をしています。できれば今年7月に日本語能力試験2級(N2)を受験したいと考えています。

Web <https://www.jice.org/tabunka/>

専門家、地域のボランティア、企業のタイアップ とよた日本語学習支援システム

豊田市は、2007年から名古屋大学、公益財団法人豊田市国際交流協会(TIA)、地域、企業の協力を得て、日本語学習支援を地域全体で支える仕組みを展開しています。この「とよた日本語学習支援システム」は、教師が教科書をベースに複数の学習者に日本語を教えるという、一般的な方法とは異なります。システムコーディネーター(SC:事業全体の企画運営)、プログラムコーディネーター(PC:教室活動の企画・運営)、日本語パートナー(JP:学習者と1対1で向き合うボランティア)の3者が役割をもち、外国人の日本語学習を支援しています。教科書は使わず、進行役のPCのリードで学習者がJPとの対話を通じて日本語を学び、またJPも学習者から母国に関する知識や情報を得たり、伝わりやすい日本語を体得したりという双方向の学びが得られます。学習者は、日本語教育の専門家ではない、異なる経験を持つJPと対話することで、実生活に近い日本語でのコミュニケーションを学ぶことができます。

東陽精機株式会社(以下「東陽精機」)は、とよた日本語学習支援システムのサポートを得て、外国人従業員を対象に日本語教室を開催しています。取材当日の午後4時半、作業着姿の外国人従業員が三々五々集まってきて、PCのリードに従って教室が始まりました。まずPCがその日のテーマ「たべもの」に沿って、「私は納豆が大好きでそ

こにキムチを入れて食べます」のように、自分のことを話してJPと学習者との会話が始まるように促します。会話が終わると、学習者は別のJPへとパートナーを換え、また会話を続けます。

1時間半の教室が終わると、次回のテーマ「スポーツ」が伝えられ、宿題が出されます。教室後、PCとJPで、教室の「ふりかえり」をします。JPたちが、その日の学習者達の感想や気づいた点等を発表し、次回以降の参考とします。東陽精機で担当の経営管理室係長の松川斗予子さんは、この取り組みの効果について、「当初はあいさつ程度だったのが、日本語が上達するにつれて職場でのコミュニケーションが進んで雰囲気や和やかになり、結果として作業効率も上がっています。日本人従業員も日本語教室に協力的で、積極的に彼らを教室に送り出しています。」と話していました。



▲日本語パートナー(JP)との対話学習

Web <https://www.toyota-j.com>

日本語パートナー(JP)として参加しています!

宇田川明博さん

学習者の日本語のレベルがわからない段階で会話を始める必要があるために、そのレベルを見極めることが大変です。この活動を始めてからは、普段の生活の中で困っている外国人を見ると、日本語で話しかけてみようという積極的な気持ちが生れました。ここで学んだ外国人が日本に来て楽しかったという思い出に残るような会話や体験をしてもらいたいです。



奥山逞司さん

ここでは日頃よく使う日本語の表現でもわからない学習者と会話を作っていく必要があるため、会話の入口を探るようにしています。丁寧にゆっくりと細かく説明し、易しい言葉を選んで意思疎通をはかる必要があるため、どんな工夫をしたら日本語が伝わるのかを、活動を通して自分自身が学んでいます。



これまで見てきたように、日本語教育は、外国人と共生するためのものへと広がっています。私たちと彼らは「教える-教えられる」関係ではなく、対等な立場で、共に暮らすために学び合うパートナーです。多面的な考え方や異文化への理解を深めて、試行錯誤しながら『対話』を生み出す日本語教育の現場は、双方向の学びの場といえます。



〈参考〉文化庁

- 平成30年度国内の日本語教育の概要
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h30/
- 日本語教育の推進に関する法律
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/index.html
- 地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/chiikinihongokyoiku/